

(三十八) 牛過窓櫺 (五裡が日つ如、譬)

ほ水牛が窓を過するが如き場合、經角や四肢

が皆過すしてまつたのには、何故尻尾先は過す

ことが出来るのか。若し此の向に向

つて此の此論を転倒して活眼を論する

みづがらの活言を下し後ならば、
國王、父の

衆生の四思の報に、下は能界、色界、

無色界、
平を寄るに工官能(管)するごとく出る。然

し未だ知らずんば厚く縮らくその尾巴に就て

思案ありと云ふつて解めてア後するべからず

あ ~~る~~ 命の糸。結ぶ。奇しく

七五配 ~~は~~ これと糸の尾と結びて表況 ~~してある。~~

精しくは言 ~~え~~ び五大五行 (地水風火空) イ

オアエウ (念作と説か ~~ら~~ れ下 ~~ら~~ るが、水

徳で ~~ある~~ 才 ~~と~~ 生命の ~~心~~ 糸と云ふ。この才で

順 々 ~~と~~ 云ふもの ~~に~~ 云と云 ~~ふ~~ の ~~は~~ 記 ~~す~~、

実相とし ~~て~~ あり ~~べ~~ くな ~~る~~ こと ~~は~~ 記 ~~す~~、

の尾の先 ~~は~~ ~~結~~ ば ~~ぬ~~ 法 ~~を~~ 示 ~~す~~、今 ~~に~~ あり ~~こ~~ する。

尾 ~~の~~ 結 ~~ぶ~~ こと ~~は~~ ~~記~~ す、
尾の結ぶこと

端 ~~を~~ 引 ~~き~~ 寄 ~~せ~~ る ~~と~~、
滴 ~~を~~ 去 ~~つ~~ こと ~~は~~ ~~記~~ す、
この意

この尾の先と端踏とし、
尾の結ぶこと

踏方なし

無作的に再び補へば、
尾の結ぶこと

尾の結ぶこと

尾の結ぶこと

觀念の上へ

とろくと

の皮言 ~~...~~ が 瑠璃子玉の標に ~~...~~ 手操り寄せられた

来る。 ~~...~~ 何んの ~~...~~ 向迄 ~~...~~ 何これ ~~...~~ が ~~...~~ 人 ~~...~~ の ~~...~~ 祀 ~~...~~

の 観 望 智 だ あり。 ~~...~~ 向 上 じ ~~...~~ と し ~~...~~ へ ~~...~~

正史である。更に ~~...~~ 是 ~~...~~ は 入 ~~...~~ っ ~~...~~ て ~~...~~

~~...~~ 此 ~~...~~ 等 ~~...~~ 即 ~~...~~ 如 ~~...~~ 今 ~~...~~ と ~~...~~ 云 ~~...~~ は ~~...~~ れ ~~...~~ る ~~...~~ 人 ~~...~~ 類 ~~...~~ の ~~...~~ 俗

葉の ~~...~~ 編 ~~...~~ 纂 ~~...~~ の ~~...~~ 地 ~~...~~ 祝 ~~...~~ と ~~...~~ ち ~~...~~ る ~~...~~ 。 ~~...~~ 中 ~~...~~ 三 ~~...~~ 云 ~~...~~ 唯 ~~...~~ へ ~~...~~ の ~~...~~ 向 ~~...~~ じ ~~...~~ は ~~...~~

斯うい ~~...~~ ち ~~...~~ 玉 ~~...~~ の ~~...~~ 端 ~~...~~ の ~~...~~ 標 ~~...~~ 儀 ~~...~~ の ~~...~~ あ ~~...~~ っ ~~...~~ て ~~...~~ ~~...~~ 満 ~~...~~ ち ~~...~~ 五 ~~...~~ 十 ~~...~~ 也

(~~...~~ 此 ~~...~~ と ~~...~~ 呼 ~~...~~ び ~~...~~ 記 ~~...~~ し ~~...~~ 。 ~~...~~ 心 ~~...~~ 三 ~~...~~ く ~~...~~ へ ~~...~~ 記 ~~...~~ 述 ~~...~~ せ ~~...~~ ば ~~...~~ 記

疏と ~~...~~ 綱 ~~...~~ の ~~...~~ 合 ~~...~~ せ ~~...~~ る ~~...~~ こ ~~...~~ と ~~...~~ 同 ~~...~~ ぶ ~~...~~ べ ~~...~~ 記 ~~...~~ 述 ~~...~~ せ ~~...~~ ば ~~...~~ 記

の ~~...~~ 記 ~~...~~ 述 ~~...~~ せ ~~...~~ ば ~~...~~ 記

同 回 録 三

この花の結ぶ生草の香気が在るは花の
エカ尾の種の方、引寄せると花の
下

如の南七が所、
としこの木の底の玉の結

ほ生草を果の知れぬのや客であるから其の香気
高麗の香気

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

玉の結んり、
玉の結んり、
玉の結んり、

史記手録り
とぬ

宇宿の地蔵、吾舟の初向と明かにする有は

世行部 ~~...~~ 以て 四恩に 報い 三有

放して ~~...~~ 大切な 尾巴子と

あること ~~...~~ 再ん 違へ

心ある ~~...~~ 障すし である。

煩悩 ~~...~~ 如善 擲の 道

も 庵の ~~...~~ 地蔵

~~...~~ 宇宿

日 昔 ~~...~~ 水徳

その 他 ~~...~~ 風地 火窟

~~...~~

厄災の跡が断れぬ人等は動物の境地に墮する。
此の心は断れぬ地蔵の心である。
此の心は断れぬ地蔵の心である。

この五大の一つと形は凡そ此の云々の意があるか

かある、これと五大と云ふ、^{その}五大と標^{標合し}行

甚名法、^{目か}年^年結^結連^連、~~...~~、^ひ脈^脈日^日から今日に^引行

いこあると^思ふ勿れ、今日か昨日と^引行

くのこある。昨日が今日と^思ふと^思ふと^思ふ

観念の道、^ま白^白、今日が明日と^思ふく^のこある。

(三十九 雲門話墮) 雲門に或時信が向ひ

た。光明寂照心河沙に遍し。その句が未だ終ら

ぬうち門が遠か^に曰つた。これは張拙秀才

の語ぢや有^りか。門信が云つた。其うぢや。門が

云つた。話しぬ^と。云つた。云つた。話しぬ^と。話のたりの

後には死心がその話しを取取つて云つた。此の信

の何処が話士か。一。一。一。若し此の話しを多へ

て、雲門の取取^りの市用^也が孤花^也あり、この

信が何に因つて話墮^也のたか^かが明か^れら^う

たら。人云の有^ん歸^となる言^格が有^る。若し

た、昔は瀧山に夏けた。因つて瀧山に命に

て用山とした。一、瀧山が一期の勇氣を傷つ

たが如何せん百丈の巻園（即ち船の檻）を出

ちい。何処に橋を架けし。何故に奥に。廻橋を

輕い仕方を辞した。何か取ん。奥に。廻橋を

て瀧山の主とし。この大佐を廻つたのが。一、

流や物子を捨て、いま白り雲達して周園の

瀧山の石を築いた。百丈の巻園と云はれ、瀧山

の奥に。住まひ。瀧山の脚元から佛がて

ぬ。一、瀧山の如く。廻り出り出た。以上公家大意

奥に

百丈の巻園

ふりかへ

巻園

巻園

(四十) 禪倒淨瓶 瀧山 は 初め百丈の門下

に后之食軍係りたつた。百丈が大瀧山(寺)の主

人 ~~百丈~~ を 望 ぶ うとして首座 を 祈め を 衆侍 を 誦

~~答案の言葉(下語)~~ ~~百丈~~ を 望 ぶ うとして首座 を 祈め を 衆侍 を 誦

~~けと~~ ~~云~~ った。請 い ぬ。 ~~云~~ った。 淨瓶 手洗ひの

瓶 を 持 つ 出し て 地上 に 置 き、向 ふ て ~~云~~ った。 云 った。 云 った。

れを嘆 ん で淨瓶と名 を 付 け、汝 等 へ を 何 と

名 を 付 け。首座 の 名 を 付 け たら 一 呼 んで木 樸 (木 の 杭) と

名 を 付 け。 蹴 し。 流 山 の 向 ふ た。 流

山 は 淨瓶 を 倒 し て出 て 行 っ た。百丈 は 云 つ

~~蹴~~ ~~し~~ ~~て~~ ~~出~~ ~~て~~ ~~行~~ ~~っ~~ ~~た~~。百丈 は 云 つ

不立文字に在る程は言活と文字と用ひぬ事

● 正建と云ひ一なるが、その子句に言活(文字)

正限りなく義重なる。先述の如く、有名は万物

の母にあり、キリスリ語に託すは、神めい言

多しう、言多は神と云ひあり、言多は即ちあり

と語へる。人向は、海にこのう、正言に、
行記看道しなるが、

万言万物の言活は、その名多しう、言多にあり。

言多は、性命の知能のひらめきであり、その律にあり。

言多のちいれ、人向の知能、律にあり。

言多は、人向の知能、律にあり。

言多は、人向の知能、律にあり。

操作される。言語と...
 者が...
 野郎...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言ふ...

言語

の 務 び 行 たい

の 務 び 行 たい

行 物 に 表 出 した

去 った 活 動 行 動

行 が 行 け ば 行 け ば

言 葉 (道 理) と 述 べ

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

行 け ば 行 け ば

理解 して 行 動